編集後記

2026年2月末、米国とイスラエルによる対イラン軍事行動を契機として、イランはホルムズ海峡を事実上封鎖しました。世界の原油海上輸送の重要な動脈であるこの海峡の混乱は、直ちに価格高騰や供給不安を招き、世界経済に大きな影響を及ぼしています。

とりわけ日本にとって原油の重要性は格別です。一次エネルギー供給に占める石油の比重は依然として高く、その大半を中東産原油に依存しています。海峡の一波乱が日本の石油化学・物流・電力をはじめとする産業、ひいては国民生活を揺さぶる現実は、原油問題を「自らの課題」としてとらえ直すことを私たちに強く迫っています。

こうした中、本号では「原油」を特集テーマとし、急激に変化する情勢のもとで各分野の専門家の皆さまにご執筆をいただきました。原油市場のシナリオ別生産見通しや2050年を見据えた長期需要見通し、アジア大洋州のサプライチェーンへの影響、さらには持続可能な石油開発についての技術的見地に至るまで、多角的な視点をお寄せいただいたことに深く感謝申し上げます。

また、巻頭言では、わが国エネルギー資源の権益確保と安定供給を支える株式会社INPEXの上田隆之社長から、原油をめぐる情勢変化と日本の選択について貴重なご寄稿を賜りました。編集部にとってこの上ない誇りであり、本特集の力強い柱となっております。

不確実性が増す時代において、原油をどう読み解くべきか。原油をめぐる動きは複雑に絡み合い、一見してその全体像をとらえがたいものです。本号を通じて、読者の皆さまが原油をめぐる最新状況や未来を俯瞰し、不確実性のなかでも確かな視点を得る手がかりとしてご活用されることを願っております。

常務理事　沼田 雄人

海外投融資
Vol.35 No.5（通巻209号）
2026年9月15日発行

発　　行
一般財団法人　海外投融資情報財団

発 行 人
加藤 太郎
〒102-0073
東京都千代田区九段北二丁目
3番6号　九段北二丁目ビル
TEL. 03-5210-3311（代）
URL. www.joi.or.jp

制作協力
（株）エディポック

＊本誌に掲載されている記事の内容や意見は、海外投融資情報財団の公式見解を示すものではありません。また、本誌に掲載された情報の正確性・完全性についてを保証するものではなく、その利用に伴う損害に関して責任を負いかねます。

●禁　無断転載

All rights reserved. No part of this magazine may be reproduced in any form or in any means without written permission from the publisher.
©Japan Institute for Overseas Investment Printed in Japan

九段だより

社会人になってから、大手町・神保町界隈で通算二十年以上働いてきた。しかし、その目と鼻の先にある「九段」が、これほど味わい深い街であるとは知らなかった。

九段と聞けば、多くの人は九段下駅や日本武道館、あるいは靖国神社を思い浮かべるだろう。私自身もそうだった。若い頃には花見やみたままつりに訪れ、九段下で飲み会を重ねたこともある。午後の外出先での面談を終え、九段下駅から坂を上っていく。武道館の擬宝珠が夕暮れに浮かぶさまを見るたびに、あの有名な楽曲が「大きな玉ねぎ」と表現した情景は、実に言い得て妙だと思う。

「九段」という地名は、この高台へ上がる坂に九層の石段が設けられていたこと、あるいは坂沿いに九段屋敷と呼ばれる幕府の施設があったことに由来すると伝えられている。江戸の頃、この辺りは下町と山の手の境界に位置し、坂上からは江戸湾や房総の山並みまで望めたという。今でこそ高層ビル群に視界は遮られているが、この地に立てば、かつて人々を魅了した眺望の記憶をどこか感じることができる。

現在の九段は、北の丸公園や千鳥ヶ淵の緑、田安門や靖国神社の歴史、そして由緒ある学校や落ち着いた街並みが違和感なく同居している。東京の中心でありながら喧騒とは少し距離を置き、文教地区らしい穏やかで品のある空気が流れている。

もちろん不便もある。JOIのオフィスがある九段北は、坂の上に広がる街であるため、飯田橋や神保町へ向かうのは容易だが、帰りはなかなかの坂道だ。夏の日には少し歩いただけで汗ばむ。しかし、その坂を上りきる頃には不思議と心が静まる。春には桜、夏には深緑、秋には銀杏。季節ごとに表情を変える風景と、長い年月を重ねた街の落ち着きが、人を自然と穏やかな気持ちにさせるのである。

セミナーへのご参加は勿論のこと、もし近くまでお越しの機会があれば、ぜひJOIにもお立ち寄りいただきたい。九段の坂を歩き、街の空気に触れつつ、グローバルビジネスの動向や世界の動きについて語り合えればこれほど嬉しいことはない。この街には、人と人が落ち着いて向き合い、じっくりと対話を重ねるのにふさわしい時間が流れているように思うのである。

さて、今月は「原油」を特集した。中東情勢の緊迫化は、カーボンニュートラル実現に向けたエネルギー転換の流れとは別に、エネルギー安全保障の観点からエネルギー源の多様化の重要性を改めて認識させた。一方で、原油・原油製品が依然として世界経済と産業活動を支える基幹エネルギーであることを浮き彫りにした。備蓄や関連インフラを含む供給体制の強靭化、さらには産油国の地政学的重要性も再認識されるなか、エネルギー転換を進めつつ、原油をいかに安定的かつ現実的に活用していくかが重要な課題となっている。本号が、こうした環境変化が既存ビジネスに与える影響や新たな事業機会の創出について考える一助となれば幸いである。

次号では、「水」を取り上げる。人口増、自然災害、公衆衛生に加え、AI時代を支えるデータセンターの拡大などを背景に、水資源の重要性は一段と高まっている。未来の社会と産業を支える「水ビジネス」の動向に、ぜひご期待いただきたい。

専務理事　加藤 太郎